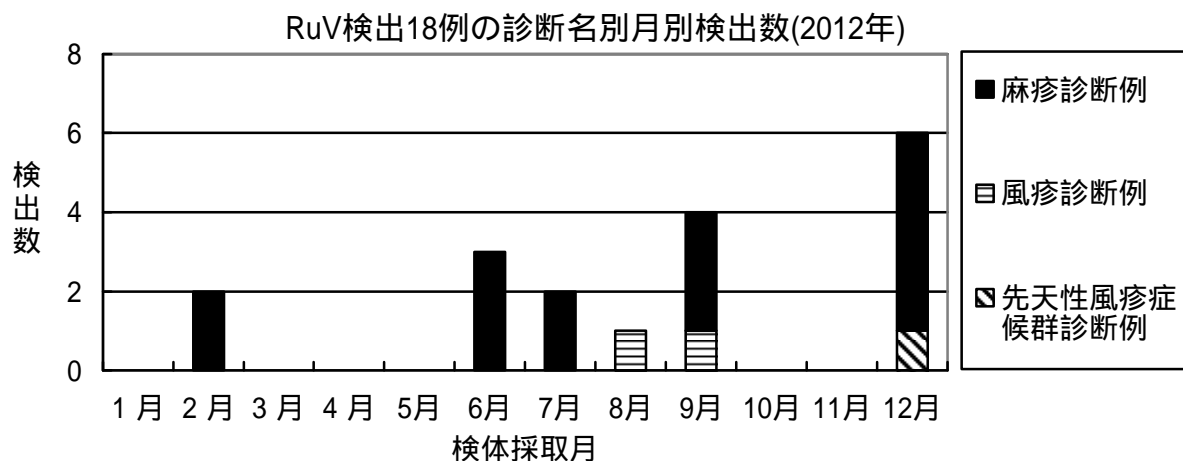


## 風しんの検出状況 (2012年)

県内の2012年の風しん患者報告数は、全数報告対象疾患となった2008年以降最多の96人でした。また、麻しん排除に向けた麻しん確定診断のために、全国の地方衛生研究所で麻しんウイルスの遺伝子検査が実施されはじめ、同時に風しんウイルス(RuV)の検査も行われるようになりました。その結果、実際には麻しんではなく風しんであったという症例が数多く報告されています。

### < ウイルス検出状況 >

2012年は、診断名風しん2例、先天性風しん症候群1例、麻しん15例の計18例からRuVが検出されました。現在までに解析の終了したRuVの遺伝子型は2Bが11例、1Eが1例でした。全国における遺伝子型の検出状況は、2Bが最も多く、次いで1Eが検出されており、県内でも同様の傾向がみられました。なお、麻しん診断例から麻しんウイルスは検出されませんでした。県内の風しんの患者報告数は、6月頃から急増し、9月頃から減少傾向がみられましたが、12月頃から再び増加傾向にあります。RuVが検出された麻しん診断例のほとんどは、風しんの流行時期に発生していました。麻しんの検査診断例は、IgM抗体の検出を根拠としているものが大部分ですが、麻しんのIgM抗体は、他の発疹性ウイルス疾患に罹患した場合でも陽性となることが知られています。確定診断のため、及び麻しん排除の観点から麻しんと同様の類症鑑別を行うために、風しんの遺伝子検査も有用です。



### < 抗体価の測定 >

RuVの抗原性の変化の有無を確認するため、3種類の遺伝子型の分離株と、市販抗原に対する抗体価を健康な人10人の血清について測定したところ、各血清はこれら4種類の抗原に対しほぼ同じ抗体価を示しました。これは、RuVの抗原性は遺伝子型にかかわらず、同一であるというこれまでの報告と同様の結果であり、現在流行しているRuVに対して、ワクチン接種が効果的であることを示しています。